てがみ

アントン・チエーホフ
鈴木三重吉訳

ユウコフは年はまだやつと九つです。せんには、お母さんと一しよに、ゐなかの村のマカリッチさまといふ、だんなのうちにおいてもらつてゐました。お母さんはそのうちの女中になつて、はたらいてゐたのです。そのお母さんが死んでしまつたので、ユウコフもそのお家にゐられなくなり、人の世話で、三月まへから、この靴屋の店へ、奉公にはいつたのでした。

こよひはクリスマスの晩です。ユウコフは親方や兄弟子たちが、教会からかへつてくるまでは、どんなにおそくまでも、ねむらないで、まつてゐなければならないのです。ユウコフは一人ぼつちで、さびしくてた

まらないので、戸だなから、そつと親方のインキつぼをもちだして、さきのさゝくれたペンで、しわくちやの紙へてがみをかきだしました。だれよりも大すきな、あのマカリッチのだんなへ出さうとおもひついたのです。

「コンスタンチン、マカリッチのだんなさま。」とユウコフは、くびをひねりくかき出しました。

「だんなさまのところは、クリスマスでにぎやかでせう。神さまが、だんなさまに、どつさりいゝことを下さるやうにいのつてます。だつて、わたしには、お父つあんもお母さんもゐなくなつたから、あとは、たゞ

だんなさまだけです。」

ユウコフはこゝまでかくと、目をあげて、くらい窓を見上げました。ろうそくの、くらいあかりが、ガラスにぼんやりうつツてゐます。それをじつとみてゐると、マカリッチのだんなの姿が、ありありとガラスの中にうかび上つて来ました。

マカリッチのだんなは、年は六十五です。せいのひくい、やせた、それでゐてとても元気なおぢいさまです。いつもたのしさうににこ〳〵してばかりゐます。昼間は台所にねころんで、料理人をからかつたりしてゐますが、夜になると、大きな羊の毛皮の外とうにく

るまつて、家畜の見まはりに出ていきます。だんなのうしろには、いつも、カシュタンカとエールといふ、二ひきの犬がついてゐます。

今だんなはどうしてゐるかしらとユウコフは思ひました。村の教会の窓はあか〳〵とかゞやいてゐるでせう。だんなはうちの門のところに、フエルトの靴をばた〳〵させながら立つてゐて、女中たちをわらはせてゐるかもしれません。

「どうだい、一つかゞねえか。」

だんなは、かぎ煙草の箱を女中にわたします。女中はうけとつてかいでみて、とてもうれしがつて、はッ

はと笑ふのでした。

「くさいだらう。あとで鼻の先をよくふくんだぞ。――おゝお、ひどく、いてつくぢやねえか。みしみし氷りつくやうだ。」

それから、だんなは、かぎ煙草を犬にもかゞせます。カシユタンカは、鼻をクン〳〵ならして、にげだします。エールはむやみに尻尾をふつて、かゞせないでくれといふやうにおせじをつかひます。

夜の空は、ふかく水色にはれて、村全たいがはつきりとうかび上つてゐます。まつ白に雪をかぶつた屋根や、煙をはいてゐる煙突やしもで銀色になつた木立な

どが、幻燈のやうにすんでみえます。空には、お星さまがおどけたやうにまたゝいてゐます。星の大河も、クリスマスがきたので、雪でみがきをかけたやうに、白くはつきりと光つてゐます。

ユウコフはためいきをして、またかきつゞけました。「きのふ、わたしは親方に頭の毛をつかまれて、うらへひきづッていかれて、ぶたれました。あかんぼのかごを、ゆすぶりながら、ゐねむりをしたからです。このまへも、おかみさんが、ニシンをあらへといつたから、しつぽのはうからあらつたら、いきなり顔を、ニシンでつきました。なぜ、ニシンをしつぽからあらつ

てはいけないのか、わたくしにはわかりません。
職人は、よくわたしに、キウリをぬすんでこいって、いひつけます。こなひだも、それを親方にめつかつて、うんとぶたれました。ぶたれるのはがまんできるが、ぶたれたあとは、きまつて、ばつに、なんにもたべさしてくれません。
まい日たべるものは、朝はパンだけで、おひるはゴッタ煮で、晩はパンだけです。お茶やスープは、親方とおかみさんが、みんなのんでしまつて、わたしにはくれません。
夜はお店でねます。でも、あかんぼと一しよにねか

されるのだから、あかんぼがなくとねむれません。なきやむまでゆすぶつてゐなければ、ぶたれます。マカリッチのだんなさま、おねがひだから、わたしをまた村へつれてつてください。ほんとにおねがひです。」

ユウコフは、口をゆがめながら、きたない袖口で目をこすり〳〵、泣きはじめました。

「だんなさま、わたしは、まい日あなたのタバコもきざみます。あなたのことを、神さまにおいのりもします。どうぞ、ごしようだから、たすけてください。

はたらかなければいけないのなら、うちの給仕さん

のかはりに、クツみがきをさせてください。でなければ、はたけに出ます。村へにげていかうと、いくどもおもひました。ほんとにいくどもです。でも、わたしには靴がない。おもてはさむいから、はだしではだめです。

わたしが大きくなつたら、だんなさまのことは、なんでもします。だんなさまが死んだらおまゐりをします。ほんとに、おねがひです。わたくしをつれにきて下さい。

モスクワは、大きな町です。どの家も、みんな、だんなさまのおうちよりりつぱで、それから、馬がどつ

さりゐます。羊はゐません。犬もゐます。でも、村の犬みたいに、人にほえついたりなんかしません。

　こなひだ、町で、つり竿をうつてゐる店をみました。つり竿には、針と糸がついてゐて、針には、こしらへたお魚がぶらさがつてゐました。針はみんな大きくて、かゝつてゐるお魚もとても大きなサメなんかです。

　鉄砲を売つてゐる店もみました。だんなさまがもつてゐるのみたいに、百円よりもつとする鉄砲です。

　それから、だんなさまのところのクリスマスのおかざりの、金いろのクルミをすこしとつておいてください。そして、それを、わたしの青い箱にしまつておい

てください。おぢようさんがきかれたら、ユウコフにやるんだからつて、さういつてください。」

ユウコフは又ためいきをついて、窓を見上げました。すると、こんどは、だんなと二人で、森へクリスマスの飾木をとりにいつたときのことが、ガラスの中にみえてきました。

その日はいゝお天気でした。だんなは、をのをかついで、雪の上を、ぜい〱ふう〱いひながら、あるいていきます。すると雪もぜい〱ふう〱ときしみます。そこでユウコフも、わざとぜい〱ふう〱いひながらついていきました。

飾りにする木をきりたほすまへに、だんなは、まづパイプで一服して、それから、かぎ煙草をゆつくりかいで、にこ〳〵しながら、どの木をきらうかとみまはします。雪につゝまれた若いもみの木は、ぢつと立つたまゝ、じぶんが切られやしないかと、心配してゐるやうです。と、そのとき、矢のやうに、雪の上をとんだものがありました。うさぎです。

「まてッ。」と、だんなは、どなりながらおひかけます。

「まてつたら。ちきしよう。えゝい、にげやがつた。この、しつぽのちよんぎれ野郎。」

もみの木を切りたほすと、それをおうちへもつてい

つて、かざりつけをするのです。

「あゝ、あのころはおもしろかつたな。」と、ユウコフはつく〴〵かうおもひました。まだお母さんも生きてゐて、だんなのところで、はたらいてゐました。お嬢さんのオルガさんは、いつもユウコフにお菓子をくれました。お嬢さんは用がないので、ユウコフに読みかきだの、百までの計算だの、しまひには、ダンスもをしへてくれました。

ユウコフは、また〳〵ふかいためいきをして、かきつゞけます。

「だんなさま、どうぞ、わたしをひきとりにきてくだ

さい。キリストさまのおんなにかけて、きつときつときてください。それから、ネリイと、めつかちのグレゴリイと、馬車やさんによろしく。さやうなら。ユウコフより。ほんとうに、だんなさま、きつとですよ。」

かきをはると、ユウコフは、紙を四つにをつて、それをこなひだかつておいた封筒に入れました。そして、しばらく考へてから、あて名をかきました。

「ゐなかの、コンスタンチン・マカリッチの、だんなさま。」

かいてしまふと、ユウコフは、もううれしくてたまらなさうに、帽子をかぶつて、外とうもつけないまゝ、

スリッパをつッかけて外へかけだしました。てがみの出しかたは、もうこのまへ肉屋のをぢさんにおそはつてちやあんとしつてゐます。郵便箱へ入れさへすれば、それだけでいゝんだよと、をぢさんが言ひました。さうすれば、よつぱらひの郵便屋が、鈴のついた馬車にのせて、世界のはてまでだつて、もつてつてくれるんだ、かうをぢさんはいひました。

ユウコフは、どん〳〵はしつて、手紙を郵便箱へ入れて来ました。だが、あんな上がきでもつて、マカリッチさんのところへつくでせうか。

それから一時間たつたときには、もう親方もかへり、

ユウコフもねむつてゐました。もう夜中すぎです。ねむつてゐるユウコフの心は、あかるいのぞみでかゞやいてゐました。ユウコフには、大きなストーヴのある、だんなのおうちの台所がみえました。

　ストーヴの上にはだんながのつてゐて、足をぶら〳〵させながら、ユウコフの手紙を料理人たちによんできかせてゐます。その下には、カシュタンカとエールが、しつぽをふり〳〵してゐました。

底本：「日本児童文学大系　第一〇巻」ほるぷ出版
1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「鈴木三重吉童話全集　第八巻」文泉堂書店
1975（昭和50）年9月
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
1931（昭和6）年12月
入力：tatsuki
校正：浅原庸子
2005年8月19日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。